

## 【一般口演1】 第2席

## 『類経図翼』と明代医書の病證

東京 北江 瀧也

『類経図翼』全十一巻は明代の代表的鍼灸書として重要な価値をもちながら、その内容はこれまでにあまり検討されていないようである。本書は他の伝統的な古医書がそうであるように、徴引による構成をとるも、張介賓自身の医理に基づいて改編編纂されている。この徴引元となった医書を探ることで、主治病證の書かれ方、選穴の基準などを解析する手がかりとなるはずである。よって今回も第十一巻の諸證灸法要穴を探って、解析結果の一端を報告するつもりである。

『類経図翼』各巻の特徴とこれまでの検討結果は次の通りである。

第六～八巻「経絡」の特徴は出処不明の主治病證と、徴引元の明らかな主治病證とによる二重構造の書かれ方をしている。先の検討の結果、この出処不明部分は楊繼洲『鍼灸大成』の該当箇所をベースにして手を加えたものと結論づけられた。

第十巻「奇兪類集」は奇穴を集めた巻である。ほとんどが『千金翼方』による徴引であることが記載されている。

第十一巻「鍼灸要覧」の諸證灸法要穴という部分は、各病門ごとに病證取穴が記載されているが、出処が不明であった。ただ、これまでの検討では、『鍼灸大成』あるいは『神応経』そして『衛生宝鑑』の記載をベースに加工したと考えられる内容が多く見られる。

今回はその構成の鋳型となったと考えられる箇所が、徐春甫『古今医統大全』に見られることを踏まえて、さらに検討を進めたい。